

## [報告] あの津波災害を振り返る ～日本海中部地震から 30 年～ (第 30 回歴史地震研究会公開講演会要旨)

防災情報機構\* 伊藤 和明

1983 年 5 月 26 日 11 時 59 分 57 秒、秋田県北部の沖合い約 80km の海底で、M7.7 の大地震が発生した。「日本海中部地震」と名づけられたこの地震では、大津波が青森～秋田の沿岸を襲って、大災害をもたらすとともに、内陸部では各所で地盤の液状化災害が発生した。死者 104 人のうち、100 人が津波による犠牲者であった。

津波の波高は、青森～秋田の沿岸で 3～7m、秋田県峰浜村では 14m の遡上高を記録している。津波の第 1 波は、深浦には地震発生の 7 分後、男鹿には 8 分後に到達したが、気象庁仙台管区気象台が大津波警報を発表したのは、地震発生から 14 分後の 12 時 14 分であった。

津波による死者 100 人のうち、35 人は能代港での港湾工事に従事していた作業員 35 人であった。また、釣り客 18 人が津波に呑まれ死亡している。

なかでも涙をさそったのは、男鹿半島の加茂青砂海岸へ遠足に来ていた小学生 13 人が津波の犠牲になったことである。秋田県の内陸部にある合川南小学校の 4、5 年生 45 人と、引率の教諭 2 人が、2 台のマイクロバスに便乗して走行していた。一行は、バスの中で強い地震の揺れを感じたのだが、加茂青砂の海岸に着いたときには、揺れも治まっていたので、海岸に出て弁当をひろげはじめた。そこへ突然の大津波が襲ってきたのである。

一瞬のうちに海に流された先生や子どもたちを、地元の人びとが船を出して懸命に救助したのだが、児童 13 人だけは、ついに助からなかったのである。

この悲劇のあと、「海岸で強い地震を感じたな

ら、引率者はなぜ津波の襲来を予想しなかったのか」という批判の声が聞かれた。

日本海中部地震による津波災害のあと、現地取材して驚いたのは、「日本海側には津波は来ない」という誤った言い伝えが広く浸透していたことである。

さらに男鹿半島では、「地震が起きたら浜へ逃げろ」とさえ伝えられていた。これは、1939 年に起きた男鹿地震のとき、半島の各所で地すべりや崖崩れが多発したために、山のきわには危険だから浜へ逃げろ、という言い伝えになったものである。

「日本海側には津波は来ない」と信じられてきた理由は何か。歴史を振り返ってみると、日本海沿岸で津波によって死者のた地震は、1833 年に起きた庄内沖地震まで遡ることになる。このときは、庄内地方と能登の沿岸で、地震と津波により、100 人あまりの死者がでた。つまり 150 年間も、犠牲者を伴うような津波災害が、日本海沿岸では発生していなかったのである。150 年のあいだには、次々と世代が交代して、過去の記憶がほとんど伝えられないまま、日本海中部地震による津波災害を迎えることになったといえよう。

注意すべき点は、日本海側の津波は、地震の発生から短時間で襲来するという点である。三陸沿岸を襲う津波の場合は、地震発生から 30 分前後の余裕があるのにひきかえ、日本海側には、地震から 7 分前後で襲来するという点である。沿岸部で強い地震を感じたなら、ただちに避難行動を起こさないと、危険にさらされることになる。津波からの迅速な避難体制を整備するうえで、きわめて重要な課題といえよう。

\* 〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-7-5 砂防会館 3 階  
電子メール: kaz-itoh@horae.dti.ne.jp